

67回目の巣立ち

昨日、平成26年度朝明中学校卒業証書授与式を、四日市市教育委員会教育委員長 渡邊悌爾 様をはじめ、多数のご来賓の方々のご臨席を賜るなかで挙行いたしました。第67回目となる式では、感動的な答辞や歌声を披露するなどした219名の生徒が、たくましく本校を巣立ちました。

そこで今回は、卒業式での生徒に向けた私のメッセージ(告諭)を、抜粋ですが掲載いたします。

(告諭)

卒業生の皆さん。皆さんとは、昨年の10月から今年の2月にかけて、昼食時に校長室で会食をしてきましたね。4・5人のひと班ずつと行ってきた会食では、皆さんと和やかに話をするのができ、たいへん有意義に感じました。

会食中、中学校生活で印象に残っていることを尋ねると、ほとんどの人が修学旅行、体育祭、文化祭、部活動などを挙げていました。さらにその理由を尋ねると、これも多くの人がそれらの活動をとおして、仲間とともに体験したこと、仲間とともに努力したこと、仲間とともに喜び合ったことが、何よりも楽しく嬉しかったと話してくれました。このことを聞いて、皆さんにとって仲間や友人は、たいへん貴重な存在であることを改めて実感しました。また、成長期である中学生にとって、仲間や友人との関わりはかけがえのない体験であることもよく分かりました。

そこで、これから新しい目標や夢に向かってスタートし、新たな人との出会いが広がるであろう皆さんに、「人と関わることの大切さ」について、ある外国人サッカー指導者の話を紹介したいと思います。

昨年の6月、ブラジルで開催されたサッカーワールドカップには、日本代表チームも出場しました。しかし、かつての日本は、ワールドカップはおろか、オリンピックへの出場もままならない、サッカーの弱小国でした。そんな日本サッカーが、今日のように発展できたのは、今から約50年前に、日本サッカー協会が一人の外国人コーチを招いたことから始まりました。その人は、今では「日本サッカーの父」と呼ばれ、その偉業が讃えられている、デットマール・クラマーさんというドイツ人です。



【来日当時のクラマーさん】

30代半ばで日本にやってきたクラマーさんは、身体は日本選手よりも小柄でした。しかし、強い心の持ち主で、当時はまだ精神的に脆かった日本選手たちに、「ドイツにはゲルマン魂がある。君たち日本人にも、自分に厳しくあれという素晴らしい大和魂があるじゃないか。それを私にみせてくれ」などと叱咤激励し、情熱的にサッカーの技術を教えました。しかも、そればかりではなく、人生の教訓についても選手たちに身をもって教えていったのです。

そのエピソードの一つが、1964年の東京オリンピックでの出来事です。

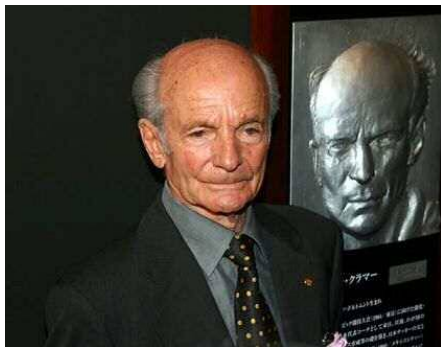
クラマーさんの指導の下、めきめき力をつけていた日本代表チームは、オリンピックで快進撃を続けました。そして予選では、世界の強豪アルゼンチンを相手に、奇跡とも言える逆転勝利をあげました。その快挙に、試合後の日本選手の控室にはマスコミやサッカー関係者、選手の同僚や友達など、多くの人々が駆け付け、お祝いムード一色となりました。

ところがクラマーさんは、「試合に勝ったものには友達が集まってくる。新しい友達もできる。しかし、本当に友人が必要なのは、敗れたときであり、敗れた方である。私はアルゼンチンを慰めに行く」と言って、負けたアルゼンチン選手の控え室に向かったのです。日本選手たちはその時、試合に勝利した嬉しさのあまり、クラマーさんの言葉や行動を気にもとめていませんでした。

数日後、勝ちあがった日本代表チームは、ベスト4への進出をかけチェコスロバキアと対戦しました。そして善戦はしましたが、惜しくも破れてしまいました。試合後、クラマーさんは、失望し、がっくりとうなだれる選手たちに、労いの言葉をかけたあと、静かにこう言いました。「負けてしまった今日、君たちのところにやってくる友達は少ないだろう。だが、今日、やってきてくれる友達こそが、君たちの本当の友達なのだ」と。これを聞いて、日本の選手たちは、クラマーさんの言葉の意味を深くかみしめたのでした。

東京オリンピック後、クラマーさんはコーチの任期を終えてドイツに帰国しましたが、技術だけではなく、精神的にも鍛えられた日本代表チームは、次のオリンピックの1968年メキシコ大会で、ついに銅メダルを獲得し、この活躍が日本サッカー発展の礎となったのです。

メダル獲得が決まった試合後、クラマーさんは選手たちを祝福するため宿舎に駆け付けました。そこには、全力を尽くして疲労困憊し、ベッドに倒れこみ眠り込んでしまった選手たちの姿がありました。クラマーさんは、その姿に「大和魂を見せてくれた」と感動し、涙を流しながら選手たちを見つめていたそうです。



クラマーさんの言葉や行動からは、人を支えることとは何かを教わることができます。それは、喜びあえる時には人は集まりやすいけれども、本当に仲間や友人の支えが必要なのはつらい思いや苦しい思いをしている時なのだという事ではないでしょうか。しかし、私たちは、身近な人が支えを必要としても、案外気が付かないものです。そこで大切になってくるのが、人に対して無関心にならず、理解しようとしたり受け止めようとしたりする「開かれた心」ではないかと思います。

【最近のクラマーさん】 クラマーさんはこうも言っています。「ものを見るのは、心である。ものを聞くのも、心である」と。その真意は、心を開き、見たり聞いたりしようとする心がなければ、目に映るのは単なる光景であり、耳に入るのはただの音になってしまうということです。さらに言えば、心を開いてこそ、人が支えを必要としていることに気付くことができ、寄り添おうとする心も芽生えてくるのではないのでしょうか。

朝明中学校では、「和学鍛」という校訓を大切に守り続けています。その最初の「和」は、「友情と協力の精神を育てる」という意味であり、校歌の1番にも歌われています。

このような校訓のもとで3年間学んだ卒業生の皆さんにおかれては、どうか本校で培った「和」を育てる心を、4月から始まる新しい生活でも生かしてってください。

また、これからの生活で出会うであろう、たくさんの人との関わりの中で、「開かれた心」を身に付け、進んで人と関わり、より支え合うことの大切さを学んでってください。

そして、それぞれの道を歩むなかで、人と人との温かな関わりを一層広げるとともに、将来、豊かな実りと多くの喜びを実現されることに心から期待しております。

デットマール・クラマー (Dettmar Cramer、1925年4月4日 -)

ドイツ・ドルトムント出身のサッカー指導者。

日本においては、日本代表の基礎を作った事から「日本サッカーの父」と呼ばれる。